
曖昧ボーダーライン

神山先

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曖昧ボーダーライン

【Nコード】

N0553BA

【作者名】

神山先

【あらすじ】

人間には生まれたとき漢字が一字与えられる。それは「きざし」と呼ばれ、人の精神や肉体を理想の姿へ導く。ときには魔術的な力を授かることもある。

魔術が栄えた日本を舞台にした、異能力学園ファンタジー。

「曖昧な境界線上にいる高校生の葛藤」ってテーマで書きました。

例えば、友達と恋人の境界線、友達と赤の他人の境界線……とか、曖昧ですよね。

プロローグ（前書き）

はじめまして。ライトノベルを書こうと思ったんですけどなかなかモチベーションが上がらないので、このサイトを知って投稿をはじめました。感想を貰うこと、それを参考にこの作品をより良いものにするのが目的なので忌憚なき意見待っています。

異能物のラノベの典型的なやつだと思えます。恐らく。あと、タイトルは仮のものです。

プロローグ

プロローグ

白い部屋。床には文字や記号が無数に並んでいる。描かれたそれらは秩序的に配置され、大きな円を象っている。

円は魔法陣と呼ばれている。部屋の中心で異様な存在感を放つ。陣の中心には清潔な樹脂で作られた籠が置かれている。その中には、数時間前に母親から取り上げられた布に包まれた赤子がいる。大きな泣き声をあげていた。

黒衣を纏った人間が魔法陣の周囲に並び、作業に没頭している。

作業開始から何時間が経っただろう、彼らは微かに衣擦れする音すら耳に入らないほどに集中力を保つ。ミスは許されない。もっとも、彼らは狭き門を潜り抜けてきたエキスパートであり、この程度のことでは失敗は起こさない。

右手にはガラス製の筆を持つ。それを医療用に加工されたガラス製のスズリに逐一漬ける。中は母胎の血液で満ちている。

黒衣は魔法陣に幾何学的な模様や様々な言語の文字を、一筆一筆、赤い文字で書き足していく。魔法陣は完成に近づいていく。

黒衣は各々、魔法陣が書かれた紙を宙に浮いた小さい机の上に置く。紙には完成した魔法陣、見本が描かれている。物理法則から解き放たれたその机は手で押すと簡単に動く。邪魔にならない場所に適宜、配置される。

……これで完成だ。黒衣の中のリーダーらしき男が最後の一笔を書き加える。周囲は安堵の声を漏らし、ベッドに横たわる母親は一筋の涙を流す。赤子は溢れんばかりの叫び声で強靱な生命力を示す。指揮官は赤ん坊に近付き、掌に収まってしまふような小さな手を取る。優しくエスコートし、赤子の親指をスズリに漬ける。そして

魔法陣の中心に押しつける。拇印が押された。

その刹那、魔法陣に光が帯びた。魔法陣の契約に成功した証だ。強力な魔法であればあるほど光は強くなる。

その輝きはすぐに止んだ。魔法陣は役目を終え、血の文字は黒ずんだ。

赤子に「きざし」が授けられた。

プロローグ（後書き）

少し矛盾していたので改稿しました。描写の問題なので内容的に変わっていません

1 - 1 新入生講演会（前書き）

改稿しています。わかりにくい描写を直しましたしました。

1 - 1 新入生講演会

—

余裕だ。これほど余裕な日は、いつ以来だろう。少なくとも高校に入ってから初めてだ。

戸岐織彦トギオリヒコは優越感に浸っている。いつもは自転車を停めるにも空いている場所がなく二階まで探しに行くが、今日は一階の出入り口付近に停めることができた。さらに優先席に座ったとしても譲る必要がない程に車内は空席が目立つ。清々しい気分だ。早起きも悪くない。

さんさんと輝く太陽が自分を祝福してくれている、そんな戯言が思い浮かぶ。それほどに織彦は機嫌が良い。

授業開始よりも二〇分以上早く到着する時間に家を出た。普段から時間にルーズで遅刻ギリギリの生活を送っている織彦にとってはとても珍しいことだ。

今日で、高校に入学してから丁度一週間が経つ。慣れ始めた通学路、時間帯が少し違えば新鮮に見えるもので、織彦は一層上機嫌になる。

改札を抜け校舎を目指す。

これだけ早い時間であれば、学生の人数はさぞ少ないのだろうな、と予想していた。しかし、制服姿の同級生がちらほら横を通り過ぎていく。元気良く走っている。

織彦は感心した。彼は中学時代からずっと帰宅部である。朝練習に向かう生徒をあまり見たことがなかった。彼らと同じように毎朝この時間に起きることを想像する、称賛せざるをえない。彼らは公園の横を通り過ぎていく。

通学路には小さな公園がある。赤茶けたブランコ、鉄棒、それに

ベンチが置かれ、横にはゴミ箱が備え付けられている。とても旧時代的な公園だ。

夕方は稀に学生の溜まり場となっている。しかし、早朝は誰一人見られない。正直に言って、この公園が取り壊されて困る人は誰もいないだろう。きっと、学生は代わりの溜まり場を見つけられる。

織彦はいつもの通り、名も知らぬ公園の横を通り過ぎようとした。しかし、公園の異変に気付いた。

ベンチに人が座っている。それも、小学生か中学生のようだ。何かの缶飲料を飲んでいる。

織彦は興味本位でその中学生を注視した。こんな時間に子供が、それもこの公園に居るのは不自然だった。

Tシャツの上に黒いパーカーを羽織り、緑色のカーゴパンツを履いている。そして野球帽を被っている。活発そうな男の子だ。

織彦はさらに目を凝らす。こんな朝早くから何をしているのだろう、興味の水準が上がる。

「え？ あれって」

子供が持つ缶飲料に見覚えがあった。父親が仕事から帰宅して風呂に入り一杯開ける飲み物と同じものようだった。

織彦は機嫌が良い。こういう気分るとき世間的に良いと評価される行動をしたくなることがある。機嫌が良い時にゴミが落ちていれば拾ってゴミ箱にすてることがあるだろう。

その程度で感覚で織彦は公園に足を踏み入れた。あの飲料が織彦の考えているものならば中学生に指摘しなければいけない。

「なあ、君」

近づけばやはりそれが、父の好きな飲料と同じものであることがわかった。

「それビールだろう？」

野球帽はまじまじと織彦を見る。

「知らない？ ビールってのは二〇歳を超えるまで飲んじゃいけないんだ」

「ふふ」

野球帽は皮肉っぱい笑みを浮かべた。そして織彦には構わず、手に持つその飲料を口に含む。

「いや、だから駄目だって」

織彦は乱暴に缶ビールを取り上げる。野球帽は表情を変えない。まるで他人事のように微笑む。

「あ、そうか」

織彦はこの子供が既に酔っぱらってしまっているのだと考えた。

警察に電話しよう、と缶ビールをベンチに置き携帯端末を取り出す。

「酔ってないよ、お兄さん」

「あ、そう」

酔っ払いの言葉には聞く耳持たず、中学生らしい少年には構わずに電話番号をタッチする。

「ホントお兄さんは固まってるね」

「は？」

「もっと柔軟に見ないと、大失敗するよ、お兄さん」

「駄目なもんは駄目なんだ、そう決まってるんだから」

「僕は二〇歳を超えているんだよ」

パネルを押す指が止まる。いい加減なことを言う、中学生に呆れながらも言えない。

「そんなわけないだろう」

「え、何で？ 意味不明なんですけど」

「だって、明らかに中学生じゃないか。小学生には見えても二〇歳には見えないな」

「理由は？」

「そんなの見た目だよ」

「なるほどね。お兄さんは人を見た目で判断できる人間なんだ。じやあさ、次の質問」

折角の早起きが台無しになった。馬鹿にされているように感じ、イライラが少しずつ募り、機嫌が悪くなってくる。

ここまでくればどうにかしてこの中学生を、警察なり家族なりに引き渡したい。中学生に主導権を握られるのは嫌だ。

「なあ、君、名前は？」

「僕は男でしようか？」

「は？ 何を言ってるんだ」

意味不明な発言であるが、咄嗟に考えてしまう。格好や言葉使いから考えると男にしか思えない。

中学生は野球帽を外す。すると帽子の中に収められていた髪がおろされる。長めの髪は肩口まで伸びていて耳を隠す。前髪はおでこで揃えられている。顔のパーツが整っていて、可愛い日本人形のようにだった。

両手で髪を掴み、顔の横に持ってくる。ツインテールのように髪を縛る。

「それとも、女？」

中学生はにこやかに笑顔を作る。さっきまで抱いていた嫌悪感を忘れてしまうほどに純粹無垢な表情だ。とても可愛い。この子が笑みを浮かべればたちまち世界は平和になってしまう。そんな錯覚を抱く。

さっきまでは活発そうな普通の男の子にしか見えなかったが、この一瞬だけを切り取ればこの中学生は間違いなくツインテールの女の子だ。男の子らしい服装だってボーイッシュと言えば全て片づけられてしまうだろう。

「ほら、わからないでしょ？」

中学生は皮肉っぽく言う。

「人は視覚から八三パーセントもの情報を得るんだって。だから正しい判断をするには目で見る必要があるよね。でも、逆にいえば視覚が原因で間違った判断をすることも多いんだよ」

どう反応すればいいかわからなかった。完全にペースを持ってかれてしまった。

「目で判断するのは大事だけど、ときには心の目で見る必要もある

よね。そうしないと境界線がぼやけて見えなくなっちゃうよ?」

「境界線?」

「大人と子供、男と女、そんな目に見えることだけの話じゃない」

織彦はいい加減飽きてきた。そもそも、この中学生に注意をするために来たのに、なぜ説教まがいのことをされなければいけないのか。よくよく考えればおかしなことだった。

「なあ、もうその話はいいからさ。とりあえず、名前教えてよ。それと中学校の名前。ああ、そうか、家の電話番号は?」

「だって、それノンアルコールだし」

「え?」

織彦は取り上げたビールのパッケージを見る。確かにそれは父が飲んでいたことのあるビールである。しかし、よく見れば「アルコール度数〇・〇〇%」と書かれていた。

「ホントお兄さん気を付けてね。見えるものに固執したら見えるものも失っちゃうよ」

「だから、もう、その話は……」

織彦は中学生の方を向く。しかし、そこには日本人形のような姿はなかった。公園には織彦がただ一人残されている。

「何だったんだよ」

織彦は狐に化かされたような気持ちになる。

「次見つけたら絶対、名前聞いてやる」

これから登校するときは公園に気を付けようと決心した。

織彦はとても心地が悪かった。足取り重く歩みを進める。その隣を同じ制服を着た生徒が駆け抜けていく。それも相当なスピードだ。一人、二人、三人、次々と生徒に追い抜かれる。朝練習の学生ではないのだろうか。なんだか様子がおかしい。

あと二〇分で授業が始まる。そもそも、この時間から朝練習なんであるのだろうか。この時間じゃ着替えて準備をしたら授業が始まってしまう気がする。

「あ！」

織彦は忘れていた。今日は授業の前に特別な朝礼がある。学校へ向かって全速力で走った。

織彦は体育館への入場時に手渡された広告に目を通す。モノクロで印刷された紙には、壇上で雄弁に演説を行う顔と同じものが描かれている。随分と若く見えたが、広告によると三七歳とある。服装次第では二〇代と言われても充分通用しそうであった。彼は有名国立大の教授である。

「日本は世界でも有数の技術力を持ちます。それと同時に世界に誇る魔術大国でもあります」

義務教育の間に幾度と聞かされた話。織彦に限らず一般的な教育課程を進んでいればこの後に続く言葉を想像することは容易い。エネルギーについての話だろう。

「諸外国が未だに原子力や火力、水力に頼った発電をしている一方、私たちの住む日本では魔力発電所がほぼ全ての電力供給を賄っています。環境に依らず発電できるシステムは資源不足で悩まされる昨今、実に賢明でエコロジーと言えます。それは魔術力、技術力を高水準に保つ日本だからこそなしえる技であり、そして誇るべき能力です。世界を見渡してもこのレベルの魔術、技術力を有する国は日本の他ありません」

耳にタコができる程聞かされた話。真剣に聴く気は起きない。

そんな織彦の退屈など、当然視界にも入っていない。教授はより一層熱を入れ演説を続ける。

余程の優等生、もしくはは相当な物好きでなければ、演説に集中できない。織彦のように集中していない人は沢山いる。体育館には鬱屈な空気が流れる。

「なぜ、日本は諸外国と一線を隔す存在になり得たのか。それは、他国の技術力、文化を認め、そして受け入れることに意欲的であっ

たことに起因します。日本人は想像力が豊かであり何よりも柔軟であります。今に至るまで漢字や英語などの外来語を独自に文化へ反映させ、さらには平仮名、新たな漢字まで開発してきました。そして、それを和製魔法陣へと応用しています」

織彦は視線を壇上から少しズラし前の席の生徒が欠伸をしているのを確認した。彼は織彦同様この演説をつまらないと感じる生徒の一人だ。

名前は確か 何だったろうか。

織彦はほんの少しだけ頭を悩ましたが、すぐに考えることをやめた。高校に入学して一週間しか経っていない今、名字か名前片方であっても、そらんじれるようなクラスメイトは少ない。織彦は名前がわからなかったことに、指で摘める程の申し訳なさを感じた。

織彦はなんとなく様子を伺っていたら目の前の彼は二度目の欠伸を漏らした。

その様子をみてしまうと織彦の中からも衝動がこみ上げてくる。

「うああ〜」

彼につられて織彦の口からも欠伸が漏れ、咄嗟に口に手を遣り誤魔化そうとする。名もわからない彼と違い声をあげてしまった。

取り乱さずに頭を下げ、周囲に形式上の謝辞を示す。

その光景を見て、隣に座る女子生徒、うみじあたる海路中は苦笑いを浮かべている。

織彦は視線を壇上に戻す。

中也織彦が集中力をほんの少し取り戻したことを確認して、耳を壇上へと向けた。

話題は次のものへと移行していた。

「私も含め日本人全てにはこの世に生を授かったとき「きざし」が与えられています。この「きざし」は貴方達の生きる指針であり、個性となり得ます」

講演も終盤に差し掛かり、ついには織彦は肩を上下させ居眠りを始める。すやすやと、幸せな寝顔を浮かべる。

隣の席では、中が織彦をただじつと見つめ、肩を竦めた。

しかし、学級委員長であるにも関わらず、中はただ溜息を吐くだけで、織彦の眠りを妨げようとはしない。

クラスのリーダーという立場を考えると、当然、居眠りは容認できることではない。担任が見つけければ直ちに織彦を注意するか、中に起こすようにと指示するだろう。それでも中は織彦にとっての最良を考え、やはり寝かせておこうと考えた。

まず、今日はこの講演会があるということで普段より三〇分も早く登校しなければならない。授業スケジュールは変わらず、講演は一限の前、〇限として開かれるからだ。織彦は普段から時間にルーズで遅刻ギリギリの登校をしている。そのルーズさを考えると、当然、翌日に備え早めに就寝するとか、少しでも長い睡眠時間を確保するような準備はしていないと考えられる。普段に比べ睡眠時間が不十分になっているだろうことは簡単に想像が付く。それに、校舎に入ってきたのもギリギリで全速力だった。疲れているのだろう。睡眠に襲われるのは当然といえた。

また、例え今、中が織彦を叩き起こしても、その分の睡眠時間は授業中へと引き延ばされるだけである。授業と講演会を天秤に掛けるならば、今睡眠を取って、授業に集中すること。それが織彦にとっての最善で有意義になると、中は考えた。

ここで織彦を起こさないことは、中の心遣いだ。いびきでもかかない限り、中は織彦を起こさない。

気持ちよさそうに寝ている織彦を眺めて中は微笑む。

壇上では「きざし」についての話が熱心に語られている。

「世界で活躍している陸上選手には『風』のきざしを持っているアスリートがいます。彼はまるで風に乗るように走ることができます。それは軽くてバネのある筋肉が可能にしています。そして、魔法陣を使わずに体から風を放つことも出来ます。それによって空気の膜を張り、空気抵抗や追い風を起こし、陸上競技で有効に働くように

活用しています。きざしは肉体的な特性を生み出します。同時に、魔術的な個性をもたらすこともあります。その能力には個人差が顕著に現れます。例えば、彼と同じように『風』のきざしを持っているからといって、誰もが世界に羽ばたける肉体を手に入れるわけではありません。風を起こすような魔術的な力が発顕するとも限りません。きざしは飽くまでも、自分の意志や願いを成就させるための手助けになります。なりたい自分をイメージすることで理想の個性を手に入れることができるでしょう。可能性は無限大です。貴方達は自分の夢を見つけそれを強く願ってください。そうすれば必ずきざしは応えてくれます」

壇上の教授は満足そうな笑みを浮かべている。

きざし。魔法陣を用いた儀式によって授かる成長への兆候。それは親が兆用漢字表に記載された漢字から一字選び出し与えられる。きざしは人間に精神や身体能力に個性を及ぼす。ときには魔法陣なしで特定の魔法を扱える能力をもたらすこともある。

『もうしょうがないなあ』

中は誰にも聞こえないように頭の中で呟いた。

中のきざしは『心』だ。『心』とは心臓を模した象形文字。中は『心』というきざしから、人体の『中心に存在する心臓』という意味を見いだした。

心臓の役割は、血流を調整することで内臓から指先までが最高のパフォーマンスを果たせるように取り計らうことである。血液が送られなければ、体は機能せずに死んでしまう。そこまで言わずとも、正常に動いていなければ、血圧が低くなり貧血を起こし、高血圧だと動脈硬化を起こす。

心臓は人間の中心で正常な動きを保つために存在している。

例えば中の在籍する一年英組で、心臓の役割を果たすことを目指す。

それが『心』が与えた、中が選んだ一本の線路だ

中のクラスで学級崩壊などあり得ない。中学時代、中の居るクラ

スでは授業がやりやすいと教師陣にも評判を得ていた。それは高校でも、いずれ得られる評価だろう。

中は少なくとも今日一日、織彦にとっての一番能率の良い過ごし方を想定し、眠りを妨げようとはしなかった。それどころか、担任の先生から織彦の体が出来ただけ見えなくなるようにと、小さい体躯の背筋を延ばし視線を遮ろうと、居眠りの片棒を担ぐようなことまでした。

これが中のきざし的一端である。

実のところ、織彦を起こさないのは、優等生である中すらもこの講演に魅力を感じておらず、通常の授業の方が有意義だろうと考えているからでもあった。

ドンツ。

中は突然の衝撃に体を震わせた。

何の前触れもなく何かが蹴られたような音がする。中の椅子には間接的な衝撃が届いている。直接受けているのは織彦の椅子だ。中の椅子が隣接していたため、衝撃が伝わってきた。

体が一瞬前のめりになり折角落ちかけた織彦の意識が戻ってしまふ。中の気遣いは無駄になってしまった。

ドンドンドンドン……

意識が朦朧としている中、突然背中に衝撃がした。

連続で椅子が蹴られる。鈍い音が織彦の体に響く。

織彦は状況を瞬時に理解できない。数秒してこの蹴りが「寝るな」という警告であるのだと把握した。

それにしてももっと穏便な方法があるだろう、苦情を言うために足の出所を確かめようと、真後ろに勢い良く振り向く。

「誰だよ、ちよつとやめ」

「シバくわよ」

「え、シバ……って」

「黙れ」

威圧感の籠もった声で威嚇される。

機嫌の悪さを顔全体を歪め表現する綴絵里依。眉毛は剃ったように細く長く、色素の薄い長髪が素行の悪い不良のようだった。

「城ヶ咲先生がどれだけ偉大か全くわかっていないの？」

「え、じょうがさ、え……先生って？」

織彦は言った直後に気付く。

入学して間もない新入生が担任はともかく、教員の名前を覚えていないのは当然である。しかし、この状況の先生が高校の先生のことではない。少なくとも今現在は知っていなければいけない名前だ。

中は頭を抱えている。絵里依は口をぼんやりと開いている。

「呆れるわ。マジで言ってる？ 頭おかしいんじゃないの？」

手元の広告に大きくゴシック体で書かれている。今まさに、講演を行っている教授が城ヶ咲静だ。

絵里依の気持ちは萎える。表情が平坦になる。

「もういいわ。前向いててよ。気が散るのよ」

「はあ？ そっちが先に手出したんだろ？」

「ウチは城ヶ咲先生の話聴きたいの」

織彦は絵里依の不躰な態度が気に入らない。気が立って口調も荒れる。それでも絵里依はどうとでもいいという風に織彦をあしらう。それが織彦の琴線に触れ、さらに機嫌が悪くなる。

「頭がおかしいのはそっちじゃねえか。情緒不安定すぎだろ」

「もつうるさいうるさい……どうでもいいから静かにして欲しいわ」

「はあ。なんだそれ。意味わかんねー」

中が織彦の服を引っ張る。

織彦はヒートアップしていたものの、中の冷静な表情で気持ちは抑えられる。

「ん……何？」

「ちよつと……ね」

中は視線で織彦に壇上横で目を光らせる担任を指し示す。担任は呆れた表情を浮かべている。

織彦は辺りを見渡す。少数ではあるが、クラス問わず近くに居る生徒の視線を集めてしまっているようだった。

織彦は我に返り、反省する。

これだけの注目を浴びてしまつてはもう喧嘩どころか居眠りも出来ない。煮え切らない気持ちを抱くが、致しかたないと、渋々教授の話に耳を傾けることにした。

織彦はそこから五分程度退屈なりにも目を開き続けた。イライラが募り、体を揺する。その度に中の視線が織彦に向かった。

1 - 2 魔法陣演習（前書き）

タイトルを変えました。

1 - 2 魔法陣演習

「各自、前回採った血を冷蔵庫から持ってきてねー」

教員が生徒に指示を送る。

演習室には一年英組の生徒と教員が居る。一限の授業中だ。

演習室と一括りに言っても、化学演習室、物理演習室など、高校には多くの種類が存在する。

しかし、生徒がどの学年に在籍していようが、それがごく普通の教育課程を進んできたのなら、一番に想像するのは彼らが今まさに居る魔法陣演習室だ。そこでは現在の日本社会で最も重視されている科目を学ぶ。

教室の脇には実験機材が置かれ、前方には大きな教卓と黒板、後方には流しがある。魔法陣演習室には、筆にスズリ、白い紙、そして布製の下敷きといった書道で使うような道具が並べられている。ただ、紙が正方形であることや、短冊状に切られた薄い紙が実験装置から垂れ下がっているという光景は書道では見られない。

医者や化学の教員が纏う白衣と色違い、黒衣に身を包んだ教員の声が響く。

「陣を描くときに血液が使われる理由は説明したよねー。絶対テストに出るから復習しておきなさいよー」

そんな教員の声は耳に入らず、織彦は不機嫌そうに呟く。

「何でお前と同じ班なんだよ」

「それはウチの名字が『つ』から始まって君の名字が『と』から始まるからじゃないかしら？ ついでに言うと、『て』で始まる人が居ないのも理由の一つよ」

絵里依は淡々と事実を述べた。先ほどまでとは打って変わって、落ち着いた口調である。織彦はそれが気にくわない。

「そんなのはわかってんだよ」

高校入学、最初の魔法陣演習の授業は準備段階の採血しか行われ

なかった。そのため班分けは行われず、実質最初の演習の授業である今日、班が発表された。出席番号順に割り振られていた。

「なんでこんな不良と同じ班にならなきゃならないんだよ」

「文句言っても仕方ないんだから早く皆の血持ってきて欲しいわ。

名前間違えないよう、お願い」

絵里依の態度は相変わらず、サバサバとしていて柳をいなすようである。

「はいはい。りょーかいしやした」

織彦は足取り重く冷蔵庫へと向かった。

生徒の正面、黒板付近ではがさごと教員が机を漁っている。

何度もあれー、おかしいなー、などと情けない声が響く。

「ちよつと紙足りなさうだから持ってくるねー。資料読んだり準備したりして待っててね。絶対実験始めちゃ駄目だゾ」

教員は語尾を可愛らしく強調して演習室を後にした。

最初の演習は初歩中の初歩、風集めの魔法陣の発動。座学で教わったことを人並みに理解していれば失敗など起こり得ない。基本中の基本だ。

中学で習ったことの復習的な要素が強く、生徒の大多数は同レベルの魔法陣を扱った経験があるだろう。

「ほら持ってきたぞ」

織彦は氏名のラベルが張られた血液パックを班の人数分、四つを実験机の上に置く。織彦はちゃんと任務が果たせたと満足な表情を浮かべている。

「はいどーぞ」

「五十音順で間違えたら不思議の域でしょ」

「あ、なに？ 聞こえないんですけど」

「何でもないわ」

下敷きの上に正方形の紙を乗せる。短冊が正方形の中心にくるよ
うに、下敷きの外側に配置された実験装置のアームを引っ張って
くれば完成だ。後は用紙に魔法陣を描き捺印を加えればそよ風が起こ

り、短冊を微かに揺らす。実験の成功が想像できる。

織彦ら班のメンバーは着々と準備を進めた。班員は各々、血液を適量、自分のスズリに入れた。

「きゃっ！」

黄色い悲鳴が教室内に響き渡る。視線が一斉に集まる。

窓から進入した黒い点が縦横無尽に教室内を駆け巡っている。

「蜂だ」

誰かが叫んだ。その声につられて、幾人が叫び声を挙げる。恐怖しているのも数人居るようであったが、それはほんの一部で、クラスの殆どが、そのイレギュラーなハプニングを楽しんでいた。

風集めの実験では教室を締め切らなければいけない。ちょうど生徒が窓を閉めようとしたタイミングで蜂が入ってきてしまったようだった。窓付近の生徒が尻餅を突いている。

教師が居ないことも相まって叫び声はエスカレートしていく。授業中としては当然不適切な光景だった。

何の前触れもなく教室の明かりが落ちた。一瞬、それに驚いた数人が大きな声を発した。が、その声はすぐに止む。生徒の大半は部屋が暗くされた意図を汲み、声のトーンを落ち着かせた。それなりの偏差値の高校であるからなのか、入学したてて騒ぎ方がわからないのか、生徒は素直に声を潜めた。

しかし、それでも、

「うわっ！ 来るな！」

騒ぎは大分収まったが、蜂が飛び回れば、それに驚く生徒がどうしても大きな声で叫んでしまう。

消灯したのは中であつた。教師が不在であれば、学級委員がその場を収めようとするのは道理だ。

中は騒ぎを鎮静化させようとしたのと同時に、教室内と外の明るさに差を付けようとした。

蜂は明るい方へ進む習性を考慮しての行動であつた。しかし、一限の講義ということもあつて日の光が教室に差し込んでくる。明度

差はつきにくい。蜂はなかなか窓の向こう側へと出ていこうとはしない。

「ねえ織彦君」

ひよこひよここと歩いてきた中は織彦の裾を引っ張る。

「何？」

「静かにするよう言っつて」

「うん？ ああ」

中はこの騒ぎの中で自分の音量では注目されないと判断し、声の大きい織彦に騒ぎを静めるよう依頼した。こういったとき混乱時、中が織彦に何かを頼む、ということは中学時代も頻繁にあったことだ。それがマイナス方向に影響したことは一度もない。

織彦は息を吸い込み、声を放つ。

「みんなー、静かにして席に着いてくれー」

しかし、注意の声は響いても静まるのは一瞬で、完全に騒ぎが収まる気配は一切ない。やはり蜂がいなくならない限り、それに恐怖する声は止まなかった。

中は頭を悩ませる。この場面で最善の行動は……。

その思いに反して、蜂は一層速く、大きく動き回る。

織彦はさらに大きな声で注目を集めようと、大きく息を吸い込む。しかし、織彦は、ポンと背中を叩かれて、すぐに息を吐き出してしまった。

「え、何？」

織彦が振り向くと、そこには気に食わない顔があり、眉をひそめた。

「なんだよ、邪魔すんな」

絵里依は織彦を手で制する。

「ウチに任せなさい」

一枚の紙と血が注がれているスズリを持ち、それを蜂が飛び回っている付近の机の上に置いた。紙には何やら複雑な図形や文字が描かれていた。織彦は、それが魔法陣であるのだと理解はしたが、そ

れがどんな効果を發揮するのか検討もつかなかった。

蜂は威勢良く飛び回る。

絵里依は蜂の動きを見据えて、スズリに親指を浸す。

何事かと、クラスの目は絵里依へと集まる。ただならない雰囲気
に、大声を挙げていた生徒は口を閉じ絵里依から距離を置く。

蜂は大きな円を描くように飛び回る。絵里依はタイミングを合
わせるように指を紙に描かれた魔法陣の中心へと押しつける。蜂が
ちょうど半紙の真上を飛行した瞬間、何かにぶつかったかのように蜂
の動きが止まった。正確には、動き回るが見えない箱に遮られ、身
動きがとれなくなっているようだった。

蜂を掴まえたことを賞賛する拍手はすぐに止む。

その光景を見たクラスメイトは声のトーンを落として話始める。

「あれって包囲の魔法陣だろ」

「中学で習った？」

「まさか。てかあれって高校でも習わないんじゃないの？ テレビ
で見たことあるぜ」

「じゃあ、大学レベル？ 何それすごくね？」

ざわざわと生徒が騒ぐのを耳にしても、絵里依は表情を変えない。
包囲は魔法陣の中心の気圧をほんの少し下げただけの風集めの魔
法陣とは大きく異なり、座標を細かく指定する必要がある。それも
縦横高さの三軸が揃わなければ綺麗な箱にはなり得ず、隙間が少し
でもあると、蜂を完全に包囲することはできない。

三軸の座標指定に加え、強度を保つ壁を六面張る。透明な壁を一
面貼ることが出来てやっと高校卒業レベルと言える。すなわち、こ
の包囲の魔法陣は入学したての高校一年生が簡単に描けるような代
物ではない。

絵里依は包囲の陣を描いた紙を手取る。それと一緒に、蜂を閉
じこめた透明の箱も動き、それに引きずられるように蜂も動く。

絵里依は器用に窓の外に紙を置く。透明の箱に閉じこめられた蜂
を窓の外に出した。そして、窓の鍵を閉める。

見事蜂を外へ逃がすことに成功した。

絵里依は振り向き、補足説明する。

「簡易式だからすぐ解けるわ。もって三分くらいかしら」

絵里依は魔法陣を簡易文字で描いた。簡易文字とは英語における筆記体である。描く所要時間を大幅に短縮できる。しかし、和製魔法陣に使われる文字は、漢字や平仮名が基本であり、数字、英語はもちろん場合によってはルーン文字まで使用されることがある。文字の種類や文字同士の繋がりや組み合わせが多すぎて、今の時代でも簡易文字を描けるどころか読める人間すらも一握りである。絵里依は簡易文字を完璧に拾得しているわけではないが、包囲の魔法陣を描ける程度の簡易文字が描ける。相当高度な術式だ。

拍手や歓声で教室が沸き上がる。クラスの中は驚きの表情をみせる。何をしたのかわからないのが大半だが、絵里依が何やら凄いことをしたということだけは理解できた。織彦もその一人で感嘆の言葉を漏らす。

「すげえじゃねえか。ただの不良じゃなかったんだな」

「ウチはただのハーフよ」

机に戻ってきて、絵里依が答える。

「関西人とイギリス人のハーフ」

織彦はなんと反応すればいいかわからず、思案する。ハーフであることは不良であることと何も繋がりが無いじゃないか。しかし、織彦は気圧されて言葉を放つことができない。

絵里依は一人で話を続ける。

「髪は地毛、シバくは母親の口癖が写ったもの、タツパがあるのも親の遺伝。中学時代もよく勘違いされたわ」

絵里依の溜息混じりの言葉はどこか寂しげであった。

「ああ……いや、でもさ、すごいな」

織彦は絵里依に気を遣い、話題を変えようとする。

「さっきのって簡易文字で書いたんだろ？ 時間も掛けないでそんな魔法陣よく書けるな」

しかし、そこで織彦に一つの疑問が浮かぶ。

「なんでこの高校来たんだ？ それだけの魔法陣が描ければ、もつと有名な進学校に行けただろう」

「ああ。うん。ウチもできるだけレベルの高い授業を受けたかったのよ。でも、一番奨学金貰えたのがこの高校だったから」

「うっ……」

織彦は地雷を踏んだような錯覚を覚えた。

「ウチんちって貧乏なのよね」

「へ、へえ……」

織彦は特に仲が良いというわけでもない絵里依の家庭の事情を少し知ってしまい、ばつの悪い表情を浮かべる。

もう一度話題を変えようと、頭を悩ます。

「にしてもすげえよ。あんな高度な魔法陣を描けるなんて、それも簡易文字でなあ」

「そんなに褒めて貰えるとかちょっと恥ずかしい……わ」

「つつても、凄いものは凄いよ」

織彦は掌を返すように絵里依を誉めた。単純に魔法陣の能力が高いからでもあるが、面識の少ない相手にどんな風に接すれば良いかわからない、というのが一番の理由だった。

織彦は続けて感嘆の言葉を吐く。

「すげーよ。うん。凄い」

「もう、いいから。やめて」

「いや、すげーって。まじ」

「ホント。凄い凄い。教師の言いつけを守らないだけあるよねー」

「え？」

織彦と絵里依は後ろから突然聞こえた声に反応し、後ろを振り向く。

「大学で、専門に勉強してやっと使えるようになるくらいのレベルかな。高校生で使えるのはホント一握りだろうね。日本中探しても一年生で使えるのは綴ちゃんしか居ないかもしれない。うん。立派

立派」

そこに立っていたのは紙を取りに教室を後にしたはずの教師だった。表情は柔らかいが、裏に恐ろしい何かをはらんでいるようだ。

「でもさー」

「あの、せんせ」

「あんな魔法陣失敗したらどんな事故が起きるかわからないよねー」

「先生、でも蜂が。それにミスらないですし」

「でもないから」

教師は絵里依の反論も聞く耳持たずで、げんこつを見舞った。

織彦はそれを横で見ている、相当強く殴るなと思った。相手が女子でも容赦無いなあ、と関心していたが、そんな油断してる間に、織彦の頭にも衝撃が与えられる。

「いてっ！　なんで俺まで」

「なんとなく」

それを見ていたグループのもう二人は自分は関係ないと身を潜めていた。笑いをこらえているようでもあった。クスクスと声が漏れている。

中は静かに二人の掛け合いを見ていた。その光景を見て一つのこゝとを危惧する。

思い過ごしたかと思いたいが、『心』の兆しがそれを許さない。

ゴクン。中は唾を飲み込む。

1 - 3 夕礼（前書き）

タイトルを変えました

1 - 3 夕礼

二限、三限、四限と、なんとか睡魔と善戦した織彦であるが、昼食を食べてからの五限は完全に沈没した。六限だけでもと、中が甲斐甲斐しくも隣から体を突付いたが、意識は虚ろで勉強にならないので、諦めて織彦に睡眠時間を与えた。講演会であと少し充分に睡眠を取れていればこころはならなかったかもしれない。

充分体力を回復した織彦はすっかりと目を開いている。

教員が教壇に立つ。学級委員長である中の号令が掛かる。夕礼が始まる。

「えーまず、アンケート書いた奴で二人。城ヶ咲教授のサイン本。ええと。『城ヶ咲静のほ乳類ならわかる。解りやすい兆候学』が貰えた。新入生全員で五冊しかないからな。貰えた奴は相当ラッキーだぞ。それに、これも相当ラッキーだ。英組では二冊貰えたからな！」

「何それ」

織彦は声を潜めて斜め前に座る中に尋ねる。

「城ヶ咲って？」

「いや、また蹴られるよ」

「それはわかってるって。アンケート？」

「本当覚えてないんだね」

中は情けないなあ、と呆れながら答える。

「朝やったじゃん……出してないの？ アンケート。書いた人の中から本が貰えるってさ」

「そだっけ。全然記憶にない」

「居眠りしてたからわからないのよ」

声の主は織彦の後ろに位置する絵里依。

「わかってるし。何でお前が俺の前の席に居るんだよ」

「だから、ウチの……」

「いや、いい、もうわかってるから言わないで」

「違うわよ。今度はウチの誕生日と戸岐君の誕生日が……」

「いや、何でもいいから」

織彦は絵里依の発言を手で制す。

中はその光景をじっと見つめる。

「どうかした？ 海路さん」

「いや、何も無いよ」

織彦と絵里依は不思議そうな表情を浮かべる。

担任が夕礼を進める。二冊の本を教卓に乗せた。

「海路と街田。前に出る」

「え、あ、はい」

中は勢い良く椅子から立ち上がり、前へと行く。

街田と呼ばれた生徒は壁際の席を立ち上がり、教卓の方へ歩いていく。

そういえば、講演会で退屈そうに欠伸をしていた奴だなと織彦は思い出す。身長が低く、髪は短め、どこにでも居そうな風貌。なんだかぱっとしないなと、勝手に失礼なことを考える。

入学式の日にあった自己紹介ではなんと言っていただろうか。無理矢理記憶から捻りだそうとして、やっと思い出す。確か『速』だか『風』だかのきざしで徒競走が得意とかなんとか言っていた。確か陸上部に入ってるのだったな。

織彦は良く思い出せたなと口には出さないが自分を褒める。

「あー。何。残念。まじかしら。ウチが選ばれないなんて、どうなっているのかしらね。この世の終わりかしら？ 世紀末ね」

「え、そんなに欲しかったんだ」

机に突っ伏して気の落ちようを全身で表す絵里依に織彦は疑問を投げ掛ける。

「そう言えば、講演会でも城ヶ坂？」

「咲ね。次間違えたらシバくわよ」

絵里依の目は細く、不機嫌な笑みを浮かべる。冗談には聞こえない

かった。

織彦は絵里依の目を見て言う。

「そうそう。その城ヶ咲教授に結構な執着があるようだったけど」
織彦は椅子を蹴飛ばされたことを思いだし、顔をしかめそうになる。

「目標なのよ」

「え？」

「城ヶ咲教授は兆候学の論文を三〇歳の時に認められて、日本で最年少の教授になった。それだけでも充分凄いのに、向上心止まらず、日本全土を駆け巡って研究してる。『きざし進化論』って知らない？　ウチが知る限り一番有名なきざしの論文なんだけど。城ヶ咲教授はウチの理想の姿。将来あんな研究者になりたいわ」

絵里依は饒舌に語る。心なしか目が輝いている。

織彦は同年代の女子が将来の夢を語り始めたことに、どう反応すればよいかわからなかった。

アイドルがどうのマンガがどうのと俗物的な話題を探し続けている高校生に比べたら、まだ自分は賢く利口だと思っていた。しかし、絵里依は未来を見据えている。それに、実験のときの功績をみる限り、夢を語るだけじゃなく努力もしている。小学生が野球選手になりたい歌手になりたいというのとはレベルが違う。

織彦は五限、六限と居眠りしていたことを思いだし、少し落ち込んだ。

一方で、絵里依が少し嬉しそうであるところを垣間見れて、微笑ましくもあった。

中が自分の席へと戻ってくる。

「何、話してたの？」

「え、別に」

「ふうん」

中は小さく首を傾げる。そして、本を掲げる。

「貰ってきた」

それだけ言うと静かに席に座った。

「本当どういう選考基準なのかしら。選考委員会でもいるの？ 自由記述欄に書いた感想の量はウチが一番のはずなのだけど」

絵里依は大きさに、中に聞こえるよう不満を漏らす。

「どうなってるのよ、本当」

「一応聞くけどさ、どれくらい書いたの」

織彦が訊ねる。

「アンケート用紙目一杯プラス……」

「プラス？」

「三〇〇字詰め原稿用紙五枚」

「読書感想文かよ！」

織彦は教室の視線が集まったことに気付き、声量を落とす。

「わざわざよくそんなもの持ってきて……講演会中に良く書き終えたな。机もなしに」

その質問にさも当然そうに絵里依は答える。

「ああ、昨日書いてきたのよ」

「何で話も聞かずに書けるんだよ」

「アンケートは毎年殆ど変わらないから」

「毎年講演聴いてんのか」

どうやって講演会聞いてんだ、学校に不法侵入でもしてんじゃないだろうな、と言おうと思ったがとどまる。ここまで熱狂的なファンの絵里依ならそれもおかしくない。一般公開の講演会に出ている可能性もあるなど、織彦は自分の中で勝手に解決した。

代わりに深い溜息を残す。一回すら聞くに耐えなかった講演会を何度か分らないが複数回聞ける絵里依が信じられなかった。

「でも、その甲斐も虚しくサイン本は貰えなかったわけよ。在学していないとサイン本は貰えないからチャンスは、幾ら潜っても、もうサイン本は貰えないの。もう貰えないの」

絵里依はチラチラと中の方を見る。

「貰える人の選考基準を明確にしてくれないのは」

チラチラと隣の席を見遣る。

「完全ランダムな運試しなのか、それともまさかプロフィールの部分が選考に関わっているのか」

チラチラチラチラ。

「本当、残念極まりない……わ」

「そう気を落とすなよ」

「がつくし」

「声に出てるぞ」

寡黙を貫いていた中が口を開く。

「絵里依ちゃん。貸してあげるからさ……」

中は絵里依の機嫌を取ろうと提案する。

「え！ 本当！？ すっごい嬉しい。でもさ……」

嘘くさい叫び声を挙げる。夕礼中なので声量は控えめだ。

「いやでもそれ持つてるのよ」

「何だよそれ！」

織彦はつい捻りもない突っ込みを入れる。内心呆れている。

「意味わかんねえー」

「ウチはサイン本が欲しいの。見たいんじゃないやなくて、持っていたいの。それでさ……差し支えなければウチが持つてる同じ本と交換して欲しいな〜なんて、思うんだけど」

「うん。わかった」

中は二つ返事で了解する。

「だからさ」

中はキョロキョロと周りを見渡す。

「夕礼終わるまでは静かにしようよ」

絵里依はサイン本を受け取ると、直ぐに前を向いて優等生らしくなった。織彦は、何だか白状な奴だなと思ひ、幾度目かの溜息をついた。

開始時と同様に中が号令をかけ担任が夕礼を閉めた。

1 - 4 帰路（前書き）

タイトルを変えました。あと、正義大の描写を少し増やしました。

1 - 4 帰路

ねえ、織彦くん」

「ん、何？」

放課後の清掃も終わりいざ帰宅、というタイミングで中が織彦に話し掛ける。

「一緒に帰ろうよ」

「え、あ、おう」

織彦は奇妙に思う。中学時代は同じグループに属していたから何度か一緒に帰ることがあった。高校に入ってクラスが同じになり、帰り道が同じであり一緒に帰っている。しかし、織彦から誘うことはあっても、中から改まって誘うことは、少なくとも高校に入ってから一度もない。声を掛けずとも毎日一緒に帰っていた。

「何？ どうかしたの？」

「え？ あ、いや、別に何も……よ」

「そう。ならいいけど」

多少の違和感を感じるも、織彦はあまり気にしないようにする。そこまで不自然かといえはそうでもない。気のせいだと、違和感を意識の外へ追放する。

織彦がふと後ろの机を見ると、絵里依の鞆がポツンと残されているのに気付いた。未だ学校に居るようだった。トイレにでも行っているのだろう。

入学して間もない時期、友人の数も少ない。気に食わないところはあるが、そこそこ話すようになったし折角だから一緒に帰ることを提案しよう。織彦はそう考えた。

「なあ、中。その綴も……」

「うん？ 早く帰ろうよ」

「え、あ、お、おう」

中が裾を引っ張って、帰宅を催促する。

中は何やら急いでるようであった。それに何だかそわそわもしている。絵里依にだつて一緒に帰る友人は居るかもしれない。突然誘つても迷惑かも知れないし、また今度誘えば良いか、と織彦は言われるがまま、帰宅の準備を整えた。

織彦と中の二人は朝通つた通学路を遡っていく。

「学校には馴れた？」

中はあるふれた話題をふる。

「そうだなー。そこそこかな。でもまあ、一緒に帰る相手が中しかいないつてのは問題になつてくるのかもなー。中はどう？」

「馴れたけど、友達はあまり作れない気がする。だから、織彦くんには迷惑掛けるかも」

実験のときに、代わりに注意することを頼んだ。そのことを言っているのだろう。

「中の頼みを迷惑だと思つたことなんかないよ。それに中はそのうち人気者になるよ」

織彦は中がクラスの心臓、学級委員長としての役割を果たしているにつれて、いつか十分な人気を得るだろう。それは好ましいことではあるが、織彦の手の届かない存在になつてしまひそうで、少し怖いことでもあつた。

それはやはりきざしによるところが大きい。誰もが自らのきざしを理想通りに活用できているとはいえない。それは授業でも習つたことだし、生活してきて存分に知らされたことだ。

織彦にわかることは、中は『心』という兆しを理想通りに活かすことができる人間だということだ。それは中学時代、この目で存分に見たことである。

クラスの中心には中が居て、クラスメイトを動かしていた。きざしが与えた個性、能力を使ってクラスの中心で役割を果たしていた。中は高校では裏方に徹したいと考えたており、見えないところでクラスを支えるつもりであつた。しかし、人に指示するのに向いた

きざしを持っていること、中学時代の功績もあり学級委員長に選ばれてしまった。中は渋々了承もした。中が学級委員長として認められてくれば自ずと人気も出てくるだろう。今はまだ決定的なイベントが起きていないというだけだ。

今は仲良くしているつもりだが、この関係がいつまで続くかわからない。そんな不安が頭によぎる。

「人気なんていらぬのに」

中は寂しそうに言う。

「学級委員長も絵里依ちゃんの方が相応しいと思う」

「え？ それは頭がいいからって意味？」

「それもあるけど、もっと根本的に」

「そうかー？ でもあの見た目じゃなあ」

織彦は思い浮かべる。色素が薄い髪と、背の高さ。それに加えて、少しつり目だったような気もする。威圧的な風貌だ。あれで長ランなんて着れば不良そのものだ。同時に、格好良いかもしれないとも思う。応援団長なんかに向いてるんじゃないだろうか。やはり、学級委員長向きではなさそうだ。

中がじつと織彦を見つめる。

「どうかした？」

そう聞くと中は唾を飲み込んで、

「いや、何でもないよ」

何だか悲しそうに言った。

やっぱりどこか変な感じがする。織彦はさっきと同じ違和感を抱いた。

間もなく駅に到着しようか、というところで織彦の少し後ろを歩く中が服の裾を引っ張る。

「こっち来て」

「え？ こっちって、何？」

中が示したのは少し大きめに開いてあるビルとビルの間。少し埃っぽくて、何の管だかわからないようなものが露出したりしている。

歩道からは殆ど死角になっている場所だ。

駅に向かう動線から外れる。歩行者からは完全に死角の位置だ。

「ねえ、織彦くん」

「なんか、放課後から変だぞ。どうしたんだ？」

「ちよつと聞いて！ 織彦くん」

中は声を少し荒げる。織彦は、こんな中の声を聞いたのは初めてだった。少し驚き、黙ってしまふ。

「付き合おう？」

一瞬、織彦の思考は停止する。全く予想していなかった言葉が中の口から発せられた。

「え？」

「付き合おうよ」

「間違つてたらごめん」

織彦は頭を掻きながら今起きたことを整理して、理解して、尋ねる。

「え、えと。それって彼氏彼女の関係になろうってこと……だよね？」

「そつだよ」

織彦は状況を理解すればするほど、軽いパーマ掛かった中の童顔が愛おしいものに見える。淡いピンクの唇の潤いに色気を感じる。小柄な体軀も落ち着いた声も全てが魅力的に感じた。すると、少しずつ恥ずかしさすら覚え、中の目を直視できなくなる。

こんな路地、ムードも何もあつたものではない。しかし、周りの風景など関係ない。中には織彦、織彦には中以外は視野に入っていない。

「ダメかな」

「いや、ダメなわけない」

中が遠い存在だと認識していたから、織彦が中に恋心を抱くことはなかった。しかし、中からアプローチを受けたことで、無意識に排除していた気持ちが浮かび上がるってくる。

中が彼女になる。織彦がうん、と頷くだけで実現してしまう。今までそう意識していなかったとはいえ、手を伸ばせば届いてしまうと思うと、願ってしまいたくなる。

付き合うつてことがどういふことなのか、織彦はわかっていない。それでも、ここで断る理由はなかった。

「うん。付き合おう」

「良かった」

中は控えめな笑みを浮かべた。織彦もつられて優しく笑った。

路地から出ても一向に緊張が解けるようなことはなかった。織彦の心臓は今も強く脈打っている。

それは一見冷静に見える中も同様で、火照ったように顔が薄く染まっている。

織彦は頭を悩ます。付き合うつてどういふことなのか、彼氏彼女ってなんなのか。織彦にそういった経験はないし、中にとつても織彦が初めての彼氏だった。

数分前には他愛ないことを話していたのに、妙に意識してしまい、不思議と喋りがぎこちなくなる。

二人の間に数十秒間、彼らにとつては数分にも感じられたかもしれないが、その少しの間沈黙が生まれた。

織彦は馴れないことを馴れないなりに考え、その沈黙を破った。

「手、繋ごうか」

「……うん」

少し前に立つ織彦が後ろ向きで中に手を伸ばす。

中は静かに応じる。

車道を跨いだところに居る歩行者が二人を指さして、微笑ましい光景だと笑っている。そんなことに、二人は一切気付かない。

二人にとつては手を繋ぐだけでも精一杯で、充分だった。

足並みを揃えて駅へと向かう。二人の間にはまた沈黙が生まれたが、先ほどよりもっと近い位置にいる。それは物理的な話だけで

はない。心理的にもずっと近いところにあつた。織彦と中が出会つてから、今までで一番近い位置だ。

織彦はこの沈黙を心地よく感じた。それは中も同様のようで、沈黙を破るようなことはしなかった。

織彦は少し汗ばんだ手が相手に伝わってしまうのではないかと心配する。しかし、中にとつてはそんなことは些細なことで、一切気にはならなかった。この幸せを噛みしめることで満足していた。告白が成功したことだけで十全な幸福を感じれた。

織彦と中の正面。ちょうど駅から二人の男女が降りてくる。身長差は織彦と中よりも大きく、三〇センチから四〇センチはあるようだった。織彦らと違うのは背が高いほうが女であることだ。

「うっひゃー。コウ君みてくれ。すげえ可愛らしいカップルを拝ませてもらったよ。見とけ見とけ。制服デートとか羨ましー」

「騒がないでくださいです。高校生カップルなんて何も不思議じゃないんですから。それよりも僕らの目的忘れないでくださいよ」

「誰に口利いてんだっつーの。そんなのわかってるって」

織彦と中の雰囲気には全くそぐわない。しっとりとしたムードにけたましい騒音が介入する。織彦はまるで、不良にでも絡まれるのではないかというような不安を抱く。その不安は的中し、異様な二人が織彦と中の進路を塞いだ。

「ねえ、ちよつと話聞いてもらっていいかな」

女性の中でも身長の高い絵里依よりも威圧感を覚える。一八〇センチはあるうかという女性が織彦と中に声を掛ける。女は赤いホットパンツに、文字がプリントされた白いＴシャツを合わせている。少し赤みを帯びた長い髪をゴムで一本に纏めている。モデルのような佇まいだ。顔のパーツもそれぞれが独立した美術品のようでも整っていた。

存在感が放っている。ヒールの高い靴がより一層高さを際立たせている。

織彦は話しかけられて、中の手を離し、困ったように背の高い女

の方を見た。

「なんのようですか？」

この風体で不良だとかヤンキーの類ではないだろうと織彦は判断した。不良と言つには身なりが綺麗すぎる。織彦は想像上の不良をイメージする。

「いや、手間を取らせるつもりはないよ。大学の活動でここ付近の調査をしてるんだ。五分と掛からないからさ」

女は頼むよー、と手を合わせる。

背が自分よりも高い女性に手を合わされるといのはなんだか悪い気分じゃないな、と織彦は不思議な気持ちを抱く。

織彦は中と目を合わせる。

「どうする？」

「うーん」

中はこの話しかけてきた二人をさつと見遣る。

「大丈夫……そうかな。少しくらいなら協力してもいいと思う」

「おー彼女さんはわかってるねー」

女は冷やかすように声を掛ける。

聞き馴れない彼女という響きに織彦と中は頬を赤らめる。以前地元のおばちゃんにも同じ様なことを言われたことがあるが、今回は冗談ではなく、それが本当であるから尚更恥ずかしい。

女は饒舌に話を進めようとする。

「いいねいいね。羨ましい限りだね。……まあ、何はともあれ、話を進めよう。最近この付近で……」

「ちよつとレンさん」

女性とは反して、女子の平均身長を大きく下回る中より少し大きい程度、男性としては相当小さい部類に入るだろう。コウ君と呼ばれた男が会話を中断させる。ジーンズにパーカーとラフな格好であり、女性と同じ年齢には到底思えなかった。専門学校に通うということは二十歳前後だろう。虹色のニット帽を目深にかぶるが、童顔は隠れそうにない。

もしかすると、大学生なのは女性の方だけで、男性の方は高校生、いや中学生なのかもしれない。姉弟という線も考えられる。しかし、それだと呼び方に違和感があるか……織彦は考えを巡らせる。

男は女に指摘する。

「そうじゃねーですよ。順序順序」

「ああ、すまんね。ついつい」

女性はとぼけたように謝る。

「最初は自己紹介しなきゃな。どこの馬の骨ともわからんやつの話なんて聞けないもんな。うんうん」

女は一人で納得して話を続ける。

「私は久遠寺遠恋。『遠』距離『恋』愛って書いて『とおこい』って読むんだ」

遠恋は胸ポケットから黒い皮のカードケースを取り出す。開き、学生証を見せる。刑事物のドラマで良く見る光景だった。

「あ、正義大ですか。凄いですね」

国立正義大学。通称、正義大。その大仰な名前の通り、正義を学ぶための大学である。学部にもよるが、主な就職先は法律事務所や警視庁、教師や政治家になるような人もいる。理系だと国営の研究者や医者になる人も多い。国家のために働きたいと考えている人が集まる大学だ。

現在の日本では最も水準の高い大学である。魔法陣、きざしの教育が本格的に国で定められた頃設立された。魔法陣を扱う術、きざしの理解、魔法研究においては世界でも最高峰の教育を受けることができる。

恋の自己紹介に続き小柄の男も自己紹介を始めた。

「僕は泣村虹介。泣く村に虹の介。よろしくです」

虹介も遠恋同様にカードケースを開く。

織彦は学生証を見る。遠恋と同じ大学名が記載されている。虹介は中学生でもなければ高校生でもない、やはり大学生らしかった。

織彦は虹介の顔をもう一度見る。目が妙に潤おっているような気がした。泣く直前のような目だ。気が弱そうな印象を受ける。

「で、まあ本題だ。立ち話で長話は嫌だろうし、五分と掛けないと言ったからな。すぐに進めよう。そうだ。君の名前は？」

遠恋は本題と言っておきながら、織彦に自己紹介を求める。

「ええと」

織彦は素性がわかったからといって、それでも得体の知れない人間に名前を言ってもいいものか悩む。中の方を見る。あまり警戒しているようではなかった。

「俺は織彦で、こちらが中です」

「織彦に中ね。ふうん。良い名前じゃないか。さて、織彦君。最近この辺りの高校で不思議な　　そうだな、都市伝説的な事件が起きているのは知っている？」

「都市伝説ですか？」

織彦は中の顔色を伺う。中にも心当たりはないようだった。

「いや、知らないです」

「そうかそうか。とても小規模なんだけれどね。簡単に説明すると私たちが確認しているだけでも二人、ある学生の性格が、それはもう豹変という具合に変化して、数時間経つとまた元の性格に戻ったんだ。一過性の二重人格のようなものかな。まだ調査不足で詳しくは説明できない」

「はあそうですか」

「いまいち要領を掴めない。適当な相槌を打ってしまう」

「それで、だ。君たちの友人に一時的に性格が変わってしまった人とか居る？　大人しかっただけで無性に元気になったり、その逆とか高校生に起きてる怪奇現象、とでも言えばいいのかな。まあ、ほんの少しだけおかしなことになってるんだよね、これが。ここ一週間君たちみたいな学校帰りの高校生に聴き回ってるんだけどなかなか成果が拳がらなくてね。事件性も薄いから、認知されにくいというのもあると思うんだけど」

遠恋は一息に話した。

遠恋が質問を投げかける度に、織彦は中に視線を合わせる。織彦は自分がそういった情報には疎いということを理解しているからだ。それに、中の方が都市伝説だとか噂の類、クラスに出回るような情報には詳しい。

しかし、新しく高校生になって、中もまだそういった情報を詳しくは知らなかった。正確にはそういった情報を集めようとはしているが、遠恋が言った情報以上のことは手に入れていない。クラスに回る情報を手に入れておきたいというのも、「心」に所以する性格の一部だ。心臓として中心にあるうとする。そのためには情報が必要だ。

今度は中が口を開く。

「申し訳ないですが全く……少なくとも私たちのクラスでは見かけません」

「んー。そうか。それは残念。もし、そういうのを耳にしたら、連絡が欲しいんだ。どんな些細なことでもいい、よろしく頼むよ。連絡先教えるからさ」

遠恋はあらかじめ用意していた紙をカードケースから取り出し、中に手渡す。

「失礼ですが……何の目的で調査をしているんですか？」
中が恐る恐る質問をする。

「大学にも何か影響を及ぼしているとか……」
「いや、そういうわけじゃあない。簡単に言っちゃえば、大学の課題だよ」

「ああ、なるほど」
織彦は納得する。警察官志望の多い正義大なら地域の調査をする課題があってもおかしくない。

「でも、別に自分の成績の為だけってわけじゃない」

遠恋は勿体付けて、気取ったように言う。まるでドラマの探偵のようない回しだ。

「裏に悪が潜んでいるような気がしていてもたってもいられなかつたんだ」

全く中の質問への回答になっっている気はしなかったが、織彦は黙ってその言葉を聞いた。雰囲気だけは格好いいような気がして水を差すのが悪いと感じた。

「ありがとうございます」

今まで黙っていた虹介が軽く会釈する。中よりも低い姿勢になった。遠恋はバイバイなどと手を振りながら、虹介は寡黙に去っていった。

中は遠恋に貰った連絡先を財布に仕舞う。

「なんだか面白い人たちだったね」

「ああ、うん。そうだなあ」

織彦は大きな台風が通り過ぎて行ったような気がした。荒らされたが、その後は静けさがやってくる。

「ま、帰ろうか」

「うん」

織彦はもう一度、中の手を握り、帰路に戻った。

1 - 4 帰路（後書き）

やっと話が動き始めたかになってくらいだと思います。もう飽き飽きしたぜって人も、そこそこ面白くなるんじゃないの、とか思ってくれちゃう人でもどしどし感想お願いします。

1 - 5 綴絵里依の期待

対等な喧嘩もした。突っ込みも入れられた。物を交換する約束もした。将来の夢まで話した。

「絶対友達だわ。うん。友達」

床から天井まで届く本棚が二つ。それ以外は机と照明、最低限の筆記具が置かれている。女の子の部屋としては幾分か質素な部屋である。絵里依はぼつんと独り言を呟く。

「友達」

絵里依はその言葉を反芻する。考えれば考えるほどに恥ずかしくなって、布団にくるまって悶えた。今日初めて会話を交わした織彦、中というクラスメイトを思い浮かべる。

昔から姉御肌と言われる絵里依の周りには人が沢山集まる。しかし、絵里依に敬意を払い慕う者ばかりで、対等な友人と呼べる相手は居なかった。一見、友達に見えた間柄の人も居たが、喧嘩もしたことがなければ、教科書を見せ合う程度の貸し借りしかしたことがない。

呼び名は『綴さん』や『絵里依さん』が大多数。中には『ねえさん』『姉御』のように聞けば親の職業を問われかねない呼び名もあった。中に呼ばれたような『ちゃん』付けなんて小学校時代でもあったかどうか怪しい。幼稚園のとき保母さんが『えりいちゃん』と呼んでくれたようなないような、という具合だ。同級生以下に『ちゃん』付けやあだ名で呼ばれた記憶は一切ない。

中学時代には絵里依の知らないところで親衛隊のようなものが作られていた。一年生から三年生までほぼ均等に集まっていた。女子教師の顧問まで居るといって、割りとしつかりした団体であった。

彼女ら曰く、あだ名なんてものは以ての外。絵里依が許可したところで、その親衛隊が、それを見つけたら撤回を要求する。

身長は一七〇を越え、髪の色素は生まれつき薄い。目も少しキツ

い気がする。物心付く頃から考えて、可愛いよりも格好いいと呼ばれることの方が多かったように思う。不良の類に間違われることは少なからずあった。

実際、親衛隊の名称が「綴組」なのも良くない。

織彦は絵里依のことを不良だと勘違いした。それ自体はよくある。しかし、面と向かって言われてことはない。大体が指をさされるような陰口だった。正直、織彦と言いつたのは楽しかった。

「海路さんはウチのことを『絵里依ちゃん』って呼んだ……呼んだわよね」

夢にまで見た女の子らしい呼び名を自分で繰り返し、恥ずかしくなって、布団にくるまったままクルクル回る。敷き布団から畳に落ちてしまってもお構いなしだ。

学習机の上に本が置いてある。さっきまで目を皿にして読んでいた、中から貰った本を眺める。

小柄で可愛らしい中を思い出す。

「あだ名とか考えちゃおっかな。迷惑かな。でも考えるだけなら」
そう思うや否や、絵里依は机に向かい、中のあだ名を考え始める。様々な案を手帳に書き連ねる。

絵里依はどんな場面でも努力を一切惜しまない人間であった。ちよつとでも考えることがあれば多少手間でもすぐにノートに書き込む。それも捨てずに残しておいて、いざというときに読み返す。そのノートはついに一〇〇冊を越えた。過去に比べて消費ペーすが早くなってきたが最近は大体月に一冊びつしり書くペースだ。

それが絵里依のきざし『努』が与えた個性である。
目的のための努力を一切惜しまない。それがいずれ価値あるものになる可能性が少しでもあるのなら、労力など惜しまない。

奨学金を得る為に受験勉強は一切怠らなかつたし、好きな魔法陣の勉強に至っては既に大学で学ぶことにまで手を出している。

一切の塾に通わず、基本独学で知識を得る。学校の先生とかマンシヨンに住む知人とか頼れる人には頻繁に教えを願った。

だから、中学では常に学年一位の成績を取った。見た目から判断すると、素行が良いとは思われない。しかし、頭脳は間違いなく優等生。かといって気取ってない。そのギャップが絵里依の魅力の一つと言える。

姉御と慕う輩が現れても領ける。絵里依と対等な存在になれる、友達と胸を張って言える同級生が今まで居なかったのは仕方ないことだったのかも知れない。

絵里依は他の人に比べて、知識を豊富に扱える。そういう脳の構造をしていた。それも『努』のきざしが与えた個性である。どんなに勉強しても全く身に付かない脳を持つ人間がいるのと同様に、人よりも知識の吸収率が異様に高い人間がいる。当然、絵里依は後者である。

「色々考えたけど……結局、シンプルでわかりやすいのに落ち着いちゃったなあ」

ノートに書いた最終案を見て頷く。

絵里依は満足してもう一度布団に潜ろうと思った。が、そうはしなかった。

寝る前にサイン本をパラパラ流し読む。サインの書いてあるページは長く眺めよう。

サインペンで書かれたサイン。崩されて殆ど読めなくなっているが、絵里依にはなんと書いてあるかわかっていた。「城ヶ咲静」ただの名前だ。しかし、絵里依にとっては尊敬すべき人の名前で、それも織彦や中と友人になれたきつかけとも言える人物。一度だって言葉を交わしたことはないが、感謝の気持ちを抱く。

絵里依はそのサイン本を一生の宝物にしようと決意して、本を閉じ、本棚に仕舞う。

そして、もう一度寢床につく。

そして、目を閉じるや否や、ぱっと飛び上がる。

「あ、そうだ。忘れ物忘れ物」

明日の学校の準備は既に終わっていたが、忘れ物を思いだし、そ

れをサブバックにしまう。

友達という言葉を引きずり、そわそわが止まない絵里依であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0553ba/>

曖昧ボーダーライン

2012年1月3日16時49分発行